

功績概要（平成 29 年秋の叙勲「瑞宝中綬賞」平成 29 年・2017 年 11 月 3 日）

番 号 124 氏 名 三 谷 恵 一

専門分野 心理学（基礎心理学）

主な功績（総評）

三 谷 恵 一は、基礎心理学及び動物心理学に於いてラット、キンギョ、ゼブラフィッシュ、ヒトを用いて後天的な環境要因を統制し、「三角形」の知覚学習は生命活動と精神活動を保持し促進するが、「円」の長期の知覚学習は生命活動と精神活動を破壊し死亡に至らしめることを発見した。更に、そのメカニズムの詳細を” 30-30-40 ミリ秒の行動分析システム”により分析したところ、①「正三角形」の誘目性は「円」よりも生得的に強く、②「倒立三角形」の誘目性は「正三角形」よりも生得的に強く、③「45 度右斜線」の誘目性は「135 度左斜線」よりも生得的に強いことを解明した。

更に目・口・右足による新しい認知行動療法（CBT）と 28 項目主観的障害単位（SUD）アンケートを開発し、これらの業績を応用して望ましい岡山大学キャンパスの創生に努めるなど心理学の発展に貢献した[著書 16 冊;論文 125 篇]

功績概要

- 1 後天的な知覚学習による生命活動と精神活動を支える環境要因の生得性に関する研究
 - ①昭和 37 年、周り道問題群による HEBB-WILLIAMS 知能検査に成熟効果が無く、経験効果が有ることをラットのより見出し、昭和 40 年、その原因は従来 of 心理学理論の説く報酬の有無ではなく、装置を探索する Haney 型潜在学習ないなしは” 豊富な環境”であるという示唆を得た。
 - ②平成 4 年、長期の「円」の知覚学習は死を招き、「三角形」は健康を促進することを発見した。更に、「倒立三角形」の誘目性は「正三角形」よりも生得的に強く、左半球の脳と繋がった「45 度右斜線」の誘目性は「135 度左斜線」よりも強いという事実をゼブラフィッシュにより明らかにした。
 - ③その成果は、生活体は” 45 度線分を精神的基盤として行動する”ことを示唆し、この直前の功績によって平成 26 年には日本心理学会から学術大会優秀発表章を受章した。
- 2 新しい認知行動療法(CBT)と 28 項目主観的障害単位(SUD)開発に関する研究
- 3 普遍的な生得的ニーズに応えた大学キャンパス創生に関する研究

*用語説明

知覚学習(perceptual learning)

事物、事象に対する知覚が、以前にそれと関連の有ることの経験を積むことによって、短時間のうちに成立するようになり、明確に識別されるようになるなど脳神経筋肉ネットワークに変化を生じること。

新しい認知行動療法(cognitive behavioral therapy: CBT)

昭和4年、ジェイコブソンは、漸進的弛緩法、すなわちリラクセーション法を開発した。認知行動療法とは、従来のリラクセーション法を基礎に、クライアントの不応状態に関連する行動的、情緒的、認知的な問題を治療標的とし、基礎心理学をはじめとする行動科学の諸理論や行動変容の諸技法を用いて、不応的な反応を軽減するとともに、適応的な反応を学習させていく近年の治療法である。三谷は、平成24年、認知に偏ることなく身体にも重点を置き、「目」「口」イライラの中心である大脳左半球のブローカ野と直結した「右足」を用いて、イライラを2分間でリセットする世界最短の新しい認知行動療法を開発し、420頁の大著にまとめた。

28項目新主観的障害単位(New Subjective Units of Disturbance Composed of 28Items)

昭和33年、ウォルピは、漠然とした不安を11件法で評定させて1個の主観的障害単位(SUD)とした。平成21年、三谷は、まず「1m先の1.5mのへび」など自然現象<8件>、ジェットコースターで宙返り」など人工現象<8件>、「仕事」など職場<6件>、「父の不機嫌の思い出」など家庭<6件>を想像しただけで生じる不安を101件法で評価して微細な緊張度を28個に数値化させるスケールを開発した。次に、それらを2Dのグラフに描くことにより、自己の心の認知地図を生き生きと可視化してクライアントにフィードバックさせ、我が心の実態を自覚させることに成功した。

大学キャンパス創生

功績1および2から示唆されるように、教室、インテリア、キャンパスのデザインは知覚学習を通して万人の脳-神経-筋肉ネットワークに無意識裡に影響を与え、教育と研究遂行に影響している。三谷は、しばしば施設委員長を務めた。文・法・経学部と図書館前の広場には哲・史・文・法・経の5学科を45度斜線などで象徴した”五道j”や、岡山後楽園の唯心山を模した築山を備えた回り道などを設けて変化する環境を歩ませ、季節や時刻によって陽の光、月の光、星の光と交互作用する何ものかを一人ひとりの心に実感させてきた。そのソフトとしての言語的意味化と、そのハード化の努力の陰に、人の力を超える普遍的な生得性がある。昭和47年、「岡山大学法文学部心理学実験室の新営」として日本心理学会の心理学研究に3頁にわたって掲載され、多くの見学者が訪れた。